



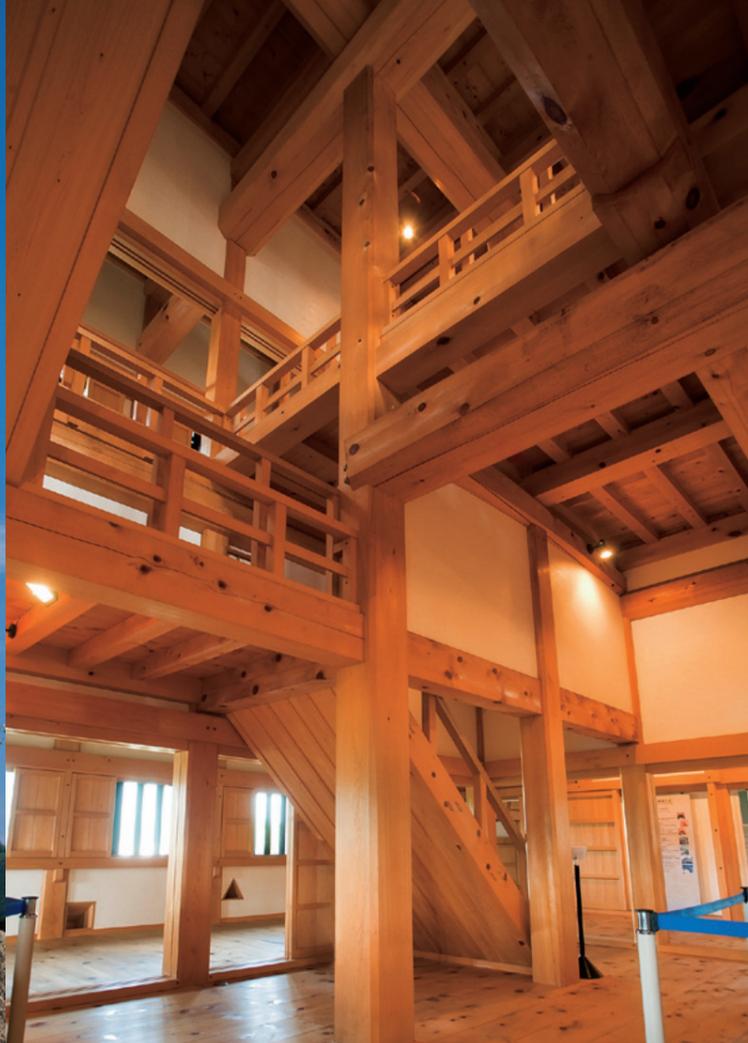
明和3年(1766)に再建された大洲城三の丸南隅櫓



江戸時代末期に再建された高欄櫓



天守閣内部の展示物



復元された天守閣の内部



大洲城復元に際して行われた和釘制作の様子



建設に携わった匠たち

平成の築城物語

遺された、4つの櫓

加藤家十三代の統治は、およそ250年にわたって続いた。その間、脇川の氾濫など自然からの試練はあったものの、戦乱に見舞われることは一度もなかった。そのお蔭で、大洲では様々な文化が熟成し、今に残る建造物や名物なども多数生まれた。まさに春風駘蕩の時代は、明治の廃藩置県により終焉を迎えた。

非常に残念なことに、加藤氏の居城であった大洲城の天守閣は、明治21年に取り壊されてしまった。わずかに遺されたのは、城山山上の本丸の台所櫓と高欄櫓、南の麓の芋綿櫓、三の丸の南隅櫓の4つの櫓のみだ。長らく、市民はこの櫓を見て往時を

偲んでいた。しかし、徐々に城を再建したいという気運が高まっていった。その思いを受けて、平成16年、平成の大洲城が完成した。

400年の時を超えて

大洲城の再建にあたって、大きなテーマとなったのが、可能な限り往時の大洲城を再現すること。例えば意匠については、江戸時代の古絵図や天守雛形、明治時代の写真などをもとに設計を行った。また見た目だけではなく、工法や使用する材についても、極力昔のままに…と方策を練った。そこで、施工に際しては富山県から熟練の宮大工を招いた。さらに「ぜひ、自分たちのまちの城を自分たちの手で」という熱

一幅の絵のような美しさ

本丸跡に築かれた四層四階の天守閣の高さは19・15メートル。戦後、国内で木造による本格的な天守閣の復元工事は4件あったが、大洲城はその中で最も高い木造天守である。さらに天守閣だけではなく、遺されていた台所櫓と高欄櫓をL字型に結ぶ多聞櫓も築かれ、複連結式天守と呼ばれる構えを見事に再現している。

脇川は大洲のシンボルだ。臥龍山荘や富士山、あるいは脇川橋など脇川を望むビューポイントは数あるが、大洲城から眺める脇川はことのほか美しい。そして脇川の河原から眺める大洲城の姿はそれを凌駕する美しさである。

意を持った地元の大工たちも施工に参加。ともに木組みを造り、白漆喰を塗り固めるという難工事に取り組んだ。多くの艱難辛苦の末、四層四階の立派な城が完成した。これは単なる復元ではない。長押や垂木に使う和釘のひとつまで、古来の工法に習った、まさに「築城」なのである。そして、400余年の時を超えて、江戸の名工と現代の名工が交流しているのだ。今、藩政時代に築かれた城は全国に十二城しか残っていない。この十二旧城には、愛媛県の松山城と宇和島城の二城がラインナップしている。確かに築城からの歴史はこの二城の足元にも及ばないかもしれない。しかし、城の普請、そこに込められた思いは、勝るとも劣らない。



大洲人

大洲城天守閣復元工事大工組合 代表者 菅野隆次さん

私たち地元の大工は、「ぜひとも大洲城の復元建築に関わりたい」との思いで、施工業者に手紙を書きました。「一緒にやりましょう」という返事を頂いた時の喜びは、言葉にできないくらいです。すぐに組合を結成し、先方の大工さんと寝食をともにし、交流を深めました。大洲城復元は人と人との繋がりで成就したのだと思っています。